

武邑尚邦著

「佛教論理学の研究」

——知識の確実性の論究——

長崎 法潤

佛教学研究のうち近年最もめざましい発展をなしたのは因明すなわち佛教論理学の研究であろう。これには種々の理由が考えられるが、ラーフラ・サンクリトヤーヤナなどの努力によって、因明に関するかなり多くの梵文原典が回収され、出版されたことにより、チベット訳との比較対照によって研究される段階に達したことが主な理由である。しかしながら、これは主に陳那以後佛教論理学を大成した法称、及びそれ以後の学僧によって書かれた論理書に関してである。陳那の名著集量論は、依然として梵文原典が存せず、チベット訳のみが現存しているところがごく近年、チベット訳からの集量論の現代語訳が北川服部両博士によって発表された。服部正明博士は、集量論中認識論に関する問題が取扱われている第一章の英訳を *Harvard Oriental Series* から刊行し、北川秀則博士は論理学に関する問題が主に取扱われている部分（第二、第三、第四、第六章前段及び第一、第二、第三章後段の一部）を和訳した（『インド古典論理学の研究』）。これによって集量論の主なる部分が解読され、陳那の論理体系の全貌がここに初めて明らかになっ

たと言っても過言ではないだろう。

本書の著者武邑尚邦教授は多年因明の研究、特に陳那の論理学の研究に従事し、本書はその成果である。伝統的な因明研究を踏まえ、近代佛教学の方法論を用い、主にチベット訳集量論を資料としながら陳那の論理体系を明らかにしたものであり、陳那の論理学研究にまた新たな収穫が加わったことになる。

本書の内容は序論（三―七七頁）、本論（七八―二五六頁）、附論（二五七―三五二頁）から成り立っている。まず序論は「論理学基礎論と佛教論理学」なる題が附されている。一「論理学の種々相と基礎論の種々相」では、佛教論理学は成佛を目指す人間が問題とされ、覚証といわれる人間の自覚における知識構造が明らかにされるから、佛教論理学とは、佛教における論理学ではなく、佛教の論理学といふべきであると主張している。二「Logic と Logos」では、インドで論理学という言葉に相当する *mīmāṃsā*, *tarka*, *anumāna*, *nyāya*, *hetuvidyā* をとりあげ、これらの語が用いられた歴史的背景及び論理思想の発展を明らかにしている。三「*pratyakṣa* という語の原初的意味」では、初期の正理学の仕事は正理の探究であり、解脱を目指す哲学 (*auṃśiki*) であり、ヨーロッパの論理学は人間思考の法則の追及によって形成されるが、『正理学は法の現証者たる聖仙によって示され、与えられた真理に対する論証とその真理の再確認である。しかも、この正理学の目的は「至高の幸福」であり、それは解脱である』すなわち解脱が至高の正理によって達せられるというインド論理学の特徴を述べている。四「因と比量」

では論証式に量を所屬せしめるヴァーツヤナの論理学が明らかにされ、その論理学が行詰りに達すること、これを打開するのが陳那であると述べている。五「*vāda-mārga*」としての論理学」では次のように語られている。論証や論議道に量の問題を從屬せしめるという形で論理学を組織したのは正理学派の人々のみではない。チャラカ本集でも方便心論でもそうである。さらに瑜伽師地論卷一五の七因明の説明にも明らかに示されている。さらにこの時期には聖教量を最究竟の量としている態度は共通している。従って当時の佛教内の因明説もインド一般の論理思想の立場と同類であり、それから陳那の論理学が確立するまでの事情を明らかにしている。六「無著・世親における因の三相説」では、因の三相説は無著・世親にもみられるが、その本当の意味が認識されていなかったことを述べ、次に陳那の量論を基礎とする論理学及びそれによる後世の影響について簡単に述べている。七「聖教量別立を認めない立場と佛陀の批判精神」では次のような興味ある問題を論じている。聖教によって与えられる宗教的真理を論証するための論証的論理を改めて、人間知性の認識に重点をおく認識論的論理に陳那を立たしめたのは、その当時の状況により、論理学自身の要求する普遍性と妥当性の確立ということである。しかしそれを陳那によって実行されえたのは、佛教のもつ立場がそれに応じたとし、その理由として(1)釈尊自身の批判精神の継承、(2)量論における「他立量性」の立場とをあげている。八「インドにおける哲学の目的」では、真実の知恵とか認識とかは単なる知性的なものではなく、あく

までも解脱智を意味すると述べ、その立場で佛教の現量は「単に知源としての感性的認識をいうのでなく、その感性的認識の誤謬を追求し、これを捨てしめることによって得られる正しい知である。」と論じている。さらに五支作法から三支作法になった過程を論じ、陳那の三支作法は因の三相説の確立と相応することを述べている。

本論は三章に分けられ、第一章「確実性の論究—*prāmāṇya-vāda*—」では、まず「量論の根本目的」が論じられている。量論は知識論と今日呼ばれるが、これは単に哲学的な学問ではなく、量説の根本的立場が、佛陀の覚の根本と一致し、しかもその量の解明が転迷開悟の道として自覚されていることを陳那及び法称の説を引用しながら論じている。二「量論確立の契機と陳那の歴史的背景」では月称の量論者に対する反論を通して陳那の量説の立場を明らかにしている。三「インドにおける量の数」では、正理学派における四量を説明し、続いて陳那以前の佛教の量説について言及している。四「正理随順者」(*nyāya-anusthin*)の意味」では、無著や世親が「聖教随順者」(*āgama-anusthin*)と呼ばれるに對し、陳那が「正理随順者」と称された理由を明らかにする。聖教の權威を現量と比量によってえられた覚慧によって根拠づけられているとする陳那の主張は徹底した論理主義、批判主義に立ってなされたものであるとし、このような陳那の量説の根底には唯識の立場があることを加えている。第二章は「感性的認識の確実性—*pratyakṣa*—」という題がつけられている。一「*pratyakṣa*in *kalpanāpōdham*」の現量規

定とその解釈」では、陳那が現量の解釈において「境に対応する」(prati-viśaya)といわなくて、「根に対応する」(prati-akṣa)と釈したところに陳那の現量説の特質があると指摘している。二「根に対応する」ということの意味」では「根に対応する」と釈した意味を論究する。唯識説の立場からすれば、識生起は、より根源的には根によってなされることを明らかにし、陳那がそのように解釈した理由を説明している。そのように規定することによって現量の除分別性も明らかになると記している。三「Nāya-bindu-tīkāにおけるpratyakṣaの語分解的説明」ではまず、pratyakṣaの語分解的説明を行い、続いて陳那による現量の対象すなわち自相の意味をくわしく論究し、「自相とは対象自身の全体的な相でなければならぬ」と記している。四「正理・勝論等諸学派の現量規定」では陳那の集量論において批判の対象となった正理、勝論、数論、弥曼沙学派の現量説を記し、とくに量説としては最も代表的な正理学派の説に対する陳那の批判について論ずる。すなわち「根と境との接触(sannikarṣa)によって生じた知にして、言詮されず(avyapadeśa)、錯誤なく(avyabhicārin)、而も決定的なる(vyavasthātmaka)が現量である」という正理学派の現量説のうち、まず陳那は根境接触をとりあげ、彼の批判は要するに正理学派のとりうる実在論的立場への評価に向けられていたことを明らかにする。続いてavyapadeśaとavyabhicārinとの規定は蛇足であるとし、vyavasthātmakaは、その規定自身に矛盾をもつと指摘し、彼の現量説に「除分別」を強調したことの基本的

立場を示している。次に陳那は世親の論軌(Vāta-vṛtti)の現量説(「かの対象によって生じた認識が現量である」)を批判する。すなわち「かの対象によって」ということは唯識説の立場に立つ陳那にとって受入れられないところである。この対象ということに関連して、現量の対象は自相であり、比量の対象は共相であるとする陳那の論理説を明らかにし、とくに陳那の現量に焦点をしばって吟味し、結論として「まず現量が根による認識であることが説かれるが、それは単に直接的認識という意味を示すものであり、根によらない分別をも現量というのであるから、現量の根本規定は、覺受の方法による自証という点にあるといわねばならない。」と述べている。

第三章「推理認識の確実性— anumāna —」は比量の研究である。一「正理学派の比量説」では、最初に正理学派の説く論証の比量と推理認識の比量とを説き、それらは佛教の為自為他の二比量とは区別すべきことを述べている。続いて陳那の為自比量は単に推理認識といわれるようなものではなく、正理学派の「認識手段による対象の吟味」ではなく、「推理認識の確実性の吟味である」と記している。二「集量論」の正理の三種比量への批判」では、集量論で正理学派の三種比量がいかに批判されているかを論じ、陳那の影響によるウッドヨータカラの比量解釈の変化もそれに加え、「知識の確実性を確認する軌範性の確立」という陳那の比量説の特徴がここからも明らかになることを述べている。三「佛教の量説は人間の認識の具体的事実のうえに立って知識の確実性を求めるものである」では次の

ことが述べられている。「因の三相」は為自比量における認識の確実性の確認の根拠としての必要な条件であり、為他比量においては正智生起の根拠としての役割をもっている。そこでこの「因の三相」について説明し、続いて、その三条件の一つでも具備しない場合、正しい因ではなくなること示す六種似因を説いている。必ずしも新しい研究ではないが、説明はややわかりにくい。四「論証式としての五支と三支」では陳那が「因の三相」によって支えられている三支作法をとった理由について主に論じ、五「論式の誤謬」では「因の三相」から陳那が創説した九句因について述べている。

附論には二つの問題を論じている。附論一「『集量論』のテキストに関する諸問題」では、集量論の「偈頌本」と「註をもった論」との関係とか、Yasudhararakṣita 訳と Kanakavarman 訳などに関する問題が論じられているが、従来あまり知られていない問題について多く言及しているので非常に興味深い。附論二「佛教論理学の典籍及び研究文献」では佛教論理学の一般的研究と、典籍と研究書とに分けて記している。入門者にとっては非常に便利であるが、それらの研究書がもつ特徴とか仏教論理学研究史上における価値についてももう少し説明を加えてあげばもっと利用度が高くなるだろう。数年前に発表されている重要な研究書がかなりもれている。例えば Moksakara-

gupta の *Tarkabhāṣā* の英訳が昭和四十一年に発表されているし、和訳は昨年の初に出ている。また『量評釈』為自比量品の自註の梵本は一九六〇年に出版されている。さらに E. Steinkeiner の *Hetubindu* に関する研究も記されていない。以上本書の内容を紹介しながら筆者の所懐の一端を述べてみた。主に陳那によってなされた正理学派などに対する批判を通して、陳那の論理説を公正にとらえ、妥当な結論を出している。内容に関しては、サンスクリットのミスプリントが見出された。また異様に感じられることは、ベーダとかベーダーンタ派とかリグ・ベーダの「ベ」である。ヴの文字を用いることを避けたのであろうが、他の頁ではニャーヤヴィドヤ、ヴィカルバ、ヘーツヴィドヤールとかブルナ、グーツヤヤナ、マードヴァが用いられているから、「ベーダ」は、従来用いられている「ヴェーダ」でもよいのではなからうか。

近年の佛教論理学研究の発展とともに、佛教論理学のもつ宗教としての佛教との結びつきが忘れられがちである。佛教論理学はあくまでも「佛陀の覚証への真実の認識が如何にして確信されうるかを尋ねるものである」(二五五頁)。本書はこの点を特に強調し、われわれに佛教論理学に対する反省を与えるものである。

(昭和四三年九月一日、百華苑、A 5 版、二、〇〇〇円)